

時の流れの中で

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
 すいすいすいすいすいすいすいすい

随 想



佐藤 信治

夜とおしなっていた蛙の聲が、いつの間にかコロギに変わり、初秋の静けさがあたりをおおう今日この頃、借りている農家の離れで一人机に向かっている、新任当初のあの、あわただしさが、ふと脳裏をかすめる。あれから、もう、半年。今更ながらに、時の流れの早さを感じる。

学生時代、「先生になったら、こんなことをしてみよう」「子どもたちとうまくそりが合うだろうか」などと、期待と不安に胸をときめかせて、書物を買ひあさり、自分なりに研究してはきたが、理論と実際とは、全く似ても似つかないものであった。

山村の小学校に赴任、担任は五年生男女各九名の小じんまりしたクラスである。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「なんだ、わずか十八名か、これなら簡単だ」

と、半分のものでかかったが、ところがである。なんとこの十八人の恐ろしさと言ったらないのである。それぞれが個性を発揮し、まったく、手のつけようがなかった。授業のベルが鳴っても席にも着かず、机間巡視をすれば、「うるせえな」などと、ふざける者があつたりして、ほとんど授業にならなかつた。

私は、初日ではあつたが、たまりかね、持ち前のいかりの大声を発してしまつた。不気味な静けさが教室を支配した。少しやりすぎたとは思つたがその時は夢中で、その日一日何をどうして過ごしたのか覚えていなくなつた。ただ、何かに裏切られたようで、くやし

くてくやしくて、なかなか寝つかれなかつた。

でも、妙なことに、次の日の朝、通勤する自分の足取りが、以外と軽かつた。不思議な程、前の日のくやしき、むなしさがどこかに吹きとんで、

「きようこそは、うまくやってやるう」というさっぱりとした気持ちになつて

いた。そんな日の繰り返しが二週間程続いたある日、「五年生になって」という作文の課題に、ほとんどの子が私について書いた。怖い先生だとか、きびしい先生だとか書いてある中で、ある男の子が

「ぼくは、信治先生が好きです。こ

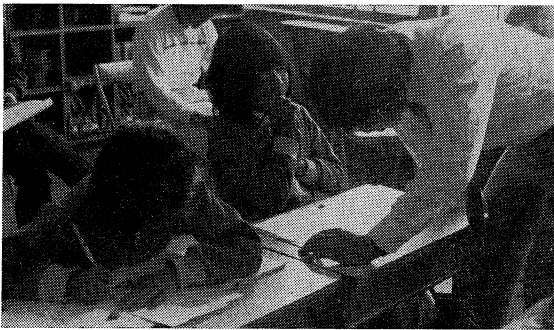
わいとぎらつている人もいますが、不思議でしかたがありません」

と書いてあつた。また、女の子は、「今度の先生は、こわいけど、やさしいところがあるから好きです。六年になつてもこの先生だといいな」と。

私は、思わずこみあげてくるものがあり、何度も、二つの作文を読み返した。これらの子に対して、特に入こひいきした記憶もないし、むしろ怒ることの方が多かつたようにも思えるのに私を理解してくれたことがとてもうれしかった。毎日苦勞したかひがあつたと思つた。これが人の言う、教師冥利なのだろうか、先生になつて本当に良かったなと思つた。たとえ一人でも二人でも、やるだけやれば、認めてくれる子どもがいるんだなと思うと、「よし、これからもがんばるぞ！」という気持ちで湧いてきた。

それ以来、「先生がやるなら、ぼくだって」という児童が一人二人と増えてきて、私も、「君たちがやるなら、先生だって」という気負つた気持ちで授業に思はず熱が入るようになった。今では、合唱指導、陸上競技、ソフトボールの練習等、何でも首をつつこんで張り切つてやつている。体あたりで誠心誠意、やるだけやれば、子どももついてくるという信念と、初めて教壇に立つたときの初心を生涯忘れずに教育の道に精進していきたいと思う。

(石川町立南山形小学校教諭)



信 頼 に こ た え て